

# 山と博物館

第53巻 第12号 2008年12月25日

市立大町山岳博物館



秋田県鹿角インターハイスキー大会（2006.2.7）

## スキー部員たち

宮本 義彦

雪国長野は、スキーシーズン真っただ中。上の写真から、「ワー」という喚声が聞こえてきます。インターハイスキー大会の華といわれる、リレー種目のスタートの瞬間です。私は中野実業高校スキー部の顧問として、約三〇年間この光景を見続けてきました。

競技スポーツは、はつきりと順位がつかず。そして勝者は、最強者として栄誉を独占します。誰もが勝者を目指しますが、それになれるのは一人だけです。しかも、努力だけでは足りないことが多いことも事実です。勝利を目指すことは競技スポーツのよいところと言えますが、大人数の集団で、しかも合宿が多く私生活の制限も多い高校スキー部では、目標が勝利だけだといろいろな葛藤が生じます。

そんな中で私は、選手たちに日本一のスキー部をつくらうと言ってきました。スキー部は自分たちのものだから、指示されてやるものではないし、上下級生は基本的には対等だという気風が第一だと強調しました。そして、強くて競技成績がいいことと、全員が人格の向上を考えている集団になることを毎年の目標に掲げさせました。

三〇年間、日本一のスキー部になれた年があったかどうかは分かりませんが、一番嬉しいのは、卒業生のこんな言葉です。「スキー部のトレーニングを思えば、仕事が苦労だとは思わない」。

今年インターハイスキー大会が、白馬村で行われます。一度、日本一を目指すスキー部員たちの応援に行ってみませんか。

（長野県山岳協会副会長）

# やり場のない悩みは、大自然の祭壇である山へ

## ——生涯学習としての心の旅路——

長野県生涯学習インストラクターの会 会長 牛越 充

### 一 大沢小屋の窓辺と炉辺

日本三大雪渓に数えられている北アルプスの「針の木雪渓」の登り口に、大沢小屋がある。私は大学の四年間、夏休みの全てをこの大沢小屋と、雪渓を登りつめた針の木峠小屋で小屋番として過ごした。

現在は同じ場所に建て替えられているが、山小屋らしい風情を最後まで残したのが大沢小屋であろう。それは道路事情がよくなり、大沢小屋に泊まらなくても一日目に針の木小屋まで登れるようになり、宿泊者が少なく対応ができたということもあるが、大正十五年に建設された百瀬慎太郎の願いもあった。早々にホテルが建ち俗化される上高地に複雑な思いを寄せていたからだ。

歌人でもあった慎太郎は

大沢の小屋の窓辺ゆゑが嶺の

秋はむ色をみつゝ幾日ぞ

と詠んだ。

信州の8月の盆を過ぎると針の木岳方面への登山客はめっきり来なくなると同時に、嶺が岳の嶺は秋色を帯びてくる。

小屋の中央を土間の廊下が通り抜けになっていた。片方に囲炉裏と名ばかりの狭い調理場が付いており、窓枠はゆがんではずれそう

になっていた。その窓辺からでなくては詠めない、寂寥にみちた人恋しの心境が伝わってくる。自然の中に孤独を求めながら孤独になると人恋しくなるのが、かつての岳人たちであった。

慎太郎の名句「山を想えば人恋し 人想えば山恋し」は、嶺が秋ばみ客足の遠のいたころの大沢小屋の炉辺で、好きな酒（酒が手に入らなかつた時代は、山仲間の届けた自家製の濁酒で）を酌みながらの心境から生まれたに違いない。それが違ってもそう決めつけている。私には、客足がなく素朴で殺風景な大沢小屋の炉辺、そして窓辺に映る秋色を帯び始めた嶺が岳と結びつけたとき、イメージが実感を呼び癒されるからである。

慎太郎はあの炉辺で、多くの文化人や時々訪れる登山客と酒を交わしながら、山や文学や人生を語り合った。慎太郎が世



大正時代の大沢小屋（百瀬堯氏所蔵）

### 二 心の弱さが露骨に現れる山

を去ったのは昭和24年（1949）であり、その翌々年から私の小屋番が続いた。慎太郎の友人や交流のあった方々、私の仲間などが訪れたとき、同じ炉辺で故人や山、人生を語り合った。それは炉辺文化であり、山小屋文化であった。

慎太郎の「山岳夜話」に次のような記述がある。

「山に憧れる人に私は憧れてきたと言ってもよい。そしてそれ等の人々は真にいい人ばかりであった。いつとはなしに山に寄って結ばれていく友情をもち難くこよないものと思ひ決めるのであった。今も尚この友情がなかったら、私は生きるかいてもない索然たる境涯に耐えられないであろう。物資にまけたものは心に生きるより外はないからだ。その心のよりどころは山への思慕であり、山への憧憬をもつ人々への懐かしさである。

……やり場のない心の悩みは大自然の祭壇である山へ訴えるのだ。そこにみそぎして心の浄化をはかることだ。」

さらに随筆「酔えるアルピニスト」では、次のように心の弱さを悟っている。

「登高の汗は苦難を物語り、山上の憩いは自然に征服された人間の姿であり、そして一散に山を馳せ下るときに、初めて包みきれない人の心の弱さが露骨に現れるではありませんか。嗚呼その最後の一日よ。段々谷の広がるにつれて、里の灯影の一つ二つがいかにか彼らの歩度を急がせることよ。一度は人の世を呪って山の懐にまでは飛び込んだものの、矢張り帰らねばならぬ我が身であったのかとは

決して負け惜しみにも言うものではない」

### 三 21世紀に求められる 人間形成への「心の旅路」

毎年行われる全国国民体育大会には登山部門がありスポーツに数えられることに異論はない。しかし日本の古来のスポーツには柔道・剣道・弓道等々「道」が付くものが多いが、今こそ、その「道」にあたるものが欲しい。「道」は心であり精神であり礼節でもある。それは自己のありようが問われる「道」でもある。先に引用した慎太郎の記述は正にそれではないか。それはまた21世紀に問われている生涯学習の基本理念でもある。

国連のユネスコは、21世紀にはどのような教育が大事であり学習はどうあったらよいかについて、20世紀末に世界の識者によってまとめられた「学習・秘められた宝」という報告書を発表した。「21世紀の扉を開く鍵は生涯学習である」として、その中の「人間として生きることを学ぶ」の章で次のように述べている。

「生涯の終わりまで続く個の発達は、自己を知ることから始まり、自己と他者との関係を築くという対話的過程である。その意味で教育とは何にもまして心の旅路であり、その里程標は絶え間ない人間形成の過程である。」

慎太郎は、先の引用文にあるように、山で結ばれた友情がなかったら素然たる境涯に耐えられなかったと言いつつ、「やり場のない心の悩みは大自然の祭壇である山」へ訴え「そこにみそぎし心の浄化を図るべきだ」と訴えている。まさにユネスコの報告書の「自己を知る」こと、「他者との関係を築く」こと等、「人間形

成」への「心の旅路」の山行ではなかったか。

### 四 現下の深い病根への アプローチ

秋葉原の無差別殺傷事件をはじめ、理解しがたい事件が続いて起きている。共通しているのは加害者の悩みの共有の場がなく「孤独」であり「絶望の表現としての殺人」だということ。慎太郎は「やり場のない心の悩みは大自然の祭壇である山へ訴えて心の浄化を図れ」と言っている。この違いは「心」や「感性」の度合いであろう。現在は極度のイノベーションの進行、ケータイ・ネット依存症による心の喪失、感性の喪失、そこから生れた「絶望の表現」としての殺人をはじめさまざまな理解しがたい犯罪が深刻化し病根は深い。

本年のノーベル賞授賞の下村氏は「テレビばかり見ていないで、自然から学べ」と言った。宇宙や動植物等の自然界から、科学としての学びだけでなく、自然への畏敬の念、情操豊かな感性等、生涯学習としての「心の旅路」に位置づく学びを得たいものである。

今こそ、そのような感性を育む教育が積極的に求められるときである。登山の知識も技術も大事だ。歩く登山道の熟知も必要だ。それと共に、先に述べた心と感性を育み自己に問う登山「道」を「心の旅路」として体得させたいものだ。

山を愛する人は、下界にいと孤独を求め、山に入り孤独になると、いやと言うほど自分が見えてきて、そこから逃れるたくなり人恋しくなると先にも述べた。

時代は変わって、先端技術の世の中でコミュニケーションの不足から、共有の感性は

消え孤独を深める一面、IT化によってメール文字の人間喪失のコミュニケーションで満足しがちな傾向もある。真のコミュニケーションは、眼差し表情が60%、言語が20%と言われるのに。

このように複雑多様化のなかで、感性だの「心の旅路」だの教育は容易いものではないことは十分承知している。しかし、幼少から、親は勿論大人を含めての、生涯学習社会構築のリズムのなかで「心の旅路」のカリキュラムを模索してのアプローチは可能だ。

学校教育には、自然とのかかわりも重視した生活科もある。道徳教育・総合学習もある。読書、読み聞かせ、発達段階に応じた自然体験等々、機会と場は枚挙に限りない。

山岳博物館等のミュウジアムの果たす役割もおおきい。本誌8号による「大町山岳文化

## 山を仰ぎ 武田 武氏を悼む

藤沢 秀

生前の親しさから「武田さん」でお許しください。

7月4日。武田さんはNHK「登山教室」のレギュラー講師の仕事で松本に行かれた。

番組のリハーサル前「ちよっと気分が悪いから」とスタジオ前の長椅子へ横になられたが、いつまでも起き上がる様子がないのでスタッフの声かけたが返事がない。後でわかったことだが脳内出血症状であった。直ぐ救急病院へ向かい手当てをうけ、治療が続けたが、そのまま眠るように7月6日に他界された。

研究会」の発足に期待することも大きい。それは、単なる登山史だけでなく、自然とは何か、自己とは何か、人間とは何か、そして現代どう生きるのか等々の「心の旅路」としての生涯学習に位置づくアプローチであることへの切なる期待である。

○ 囲炉裏のあった当時の大沢小屋のモデルが大町市山岳博物館に展示されている。企画再建に参画したけれど、本物の風情は十分にかもし出せなかったが、炉辺に腰を下ろしての、沈黙のひと時はいかがだろうか。忙しい世の中だからこそ「心のみさぎ」の場を願うのだ。自分にそれが欠けていた反省もあつてのこと。  
(元大沢小屋小屋番)

以上が、後日、ご親戚で山の好きな田原正子さんからお聞きしたお亡くなりになるまでの3日間の経過である。

当時、武田さんは当山岳博物館協議会の委員長として会議のまとめ役をされていた。

私事になるが、私も委員であったが山岳関係の知識に疎いことから、数ヶ月に一度の委員会の開催日は、武田さんから山岳情報を聞く日でもあり、すぐ答えてくれるその話し方はいつも丁寧で「生真面目な方」という印象を持ち続けていた。

それが、この追悼文を書くにあたりお訪ね

した「親戚の田原正子さんは「いいえ、叔父はとても茶目っ気のある人でしたよ」と言うのである。「親戚の集まりなどでは、話が盛り上がるまで冗談の連続で、酔えば手踊りが得意だったし、中学3年生のお孫さんを可愛がっていて家でよく食事を一緒にしたり、サッカーの試合の時は必ずグラウンドで大声で応援していましたよ」とも話された。

松川村のシルバー人材センターが語るのは「子供育成会の会長をやっていた子供たちからはたいへん慕われていた、とかシルバーボランティアでは樹木剪定の指導員をされていて、ある時、並木通りを歩いていると、突然樹上の茂みから「××さん、お元気ですか」と大声がして、見れば剪定中の武田さん

の笑顔で、田原さん同様に「茶目っ気のある方でしたよ」と言うのである。  
武田さんは、前に長野県山岳協会の会長をされていて、現在の副会長の大西 浩氏は、「中信高校山岳部かわらばん」へ追悼文を寄せられ、それにも武田さんの生一本な性格を書いておられるのでその一部を紹介させて戴く。

1964年のギャチュンカン遠征の報告書には「シエルバに慕われたタケサーブ」という標題で武田さんのことが書かれている。  
(注、サーブはネパール語で旦那、親方の意)

曰く「からだか隊員の中でいちばん小さいところから「チビタケ」と呼ばれるが、なにしてる全日本山岳連盟公認スピッツですから、へ

来事がありその善後策で直接お宅へ伺って貴重なアドバイスをいただいたこと、今年の1月の信高山岳協会の総会では元気な「乾杯」の発声をいただいたこと。4月の長野県山岳協会の総会では、まだまだ意気軒昂な様子でこんな突然お別れすることになるとは思いませんでした、と結ばれている。

これらは、私の「武田さん」からは想像できない別人のような人物像だった。今思えば、登山姿の武田さんをもっと知りたかったと残念でならない。

武田さんは、当山岳博物館発行「山と博物館」の平成12年3月25日号に「光と山」と題して寄稿をされている。

ここに、武田さんが山に魅せられた動機が大町高校時代の一年生の時に誕生した「全校登山」の体験で、それが登山家になる動機でもあったと書かれていることは、大町市民にとつて貴重な記録である。

全校登山の第一回は、蓮華岳登頂で「その時に山の素晴らしさに魅せられたのが私の登山家になる動機になった。この登山がまさか私をヒマラヤはじめ、世界の高峰まで行かせ、今なお山登りを続ける人生の出発点になろうとは思ってもよらなかった」そして最初の全校登山の感激を「魅せられた、光る雪稜のたたくまは半世紀すぎた今も、鮮明に網膜と脳裏に焼きついている。長い山歩きを振り返ってみると、不思議に、山と光景が蘇ってくる」

そして、御来光の神秘にふれたいと夜半から多くの山へ登りはじめ、暗夜に登山靴が岩角に当たって出す火花を線香花火に例えたり、プロッケン現象は、初秋の夕暮れに槍ヶ岳山頂で遭遇している。

「遠く加賀の白山の方だろうか。赤い大きな

太陽が沈む間際、反対側の霧の中に、不思議な幻影が浮かんでいる。手足を動かせば幻影も全く同じ動作をする。しかも幻影の周囲には美しい虹の輪が仏像の光背をいたたいているようだ」と登山の醍醐味を極めた経験をされている。

去る平成13年は、大町山岳博物館の創立50周年で、年間に多彩な行事や祝典が開催された。シンポジウムでは今井通子、野口健氏など著名な山岳家をパネリストとしてお招きしたが、その時の実行委員長としてスーツ姿で舞台に立ち、その翌日は「岩崎元郎・みなみらんぼうと登る爺ヶ岳登山教室」では山男姿になって登山隊長として両氏を含む約100名の参加者のリーダーをする。この多彩な労働をなんなくこなす体力と気力は登山で鍛えあげた武田さんならではのといえよう。

無駄のない小振りな体型は見るからに古武士の風格だった「武田さん！」天国からの北アルプス登山は山頂がスタート点ですか？否、多分、武田さんは、山麓まで降りてきて登山者たちの登頂を下山まで見守ってくれてから、天国へ帰ることでしょう。

どうか、北アルプス山麓が健全に発展するよういつまでもお守りください。

(大町山岳博物館協議会 副委員長)

山と博物館 第53巻 第12号

発行 二〇〇八年十二月二十五日発行  
〒398-0002 長野県大町市大町八〇五六

TEL 〇二六-二二二-〇二二二  
FAX 〇二六-二二二-二二二二

E-mail: [sunpak@city.comachi.nagano.jp](mailto:sunpak@city.comachi.nagano.jp)  
<http://www.city.comachi.nagano.jp/sunpak/>

印刷 有限会社 北辰 印刷  
定価 年額 一、五〇〇円(送料含む)(切手不可)

郵便振替口座番号 〇〇五四〇〇七-一三二九九三



山岳博物館50周年記念登山より

大西氏は、さらに続けて、個人的には、4年前にネパール山岳協会との協定調印で現地へ行く直前に、思いがけない出